外国語部会

県研究主題
コミュニケーション能力の基礎を育成する学習指導と評価の工夫・改善

提案１　　提案者　米澤　典子（湘南三浦地区）

＜研究主題＞
やり取りできる子どもを目指した反復活動の有効活用

１　提案内容

藤沢市立六会中学校は、自分の考えや気持ち、体験などを伝え合うことができる生徒を育成することを目的としている。帯活動「Conversation Frame」を活用した実践を通して、やり取りのできる生徒の育成を目指した。

（１）　課題意識

生徒は、行事等の取り組みに積極性は見られるが、授業の場になると、「失敗」を恐れてしまい、考えたことを進んで伝えることが出来ないという実情がある。ここで言う「失敗」というのは、正しい英語が組み立てられずに伝わらないと思ってしまうことである。また、ＦＬＴの話には笑顔で反応するが、この「失敗」に対する恐れがあり、コミュニケーションすることにつながらない。このような生徒の不安を、会話の型を示すことで和らげ、実際のコミュニケーションにつなげていきたいという。そこで、研究主題にも上がっているやり取りを通じて、「できた」という達成感を味わわせたい。

（２）　実践内容

授業の最初に、毎回、帯活動として「Conversation Frame」を10分程度行っている。身に付けさせたい文法事項を盛り込みながら、決められた形式にそって対話練習を行うというものである。この型における対話は、挨拶から始まり、質問とそれに対する返答・応答、結びの形式となっている。帯活動として何度も繰り返し行うことによって、会話の流れが生徒の中にインプットされ、スムーズにコミュニケーションを行うことができるようになる。各学年、各単元によって身に付けさせたい文法事項を提示し、それを使いスキットを作ることも行う。

また、発展として、各単元において「Conversation Frame」を使ったスキットを活用して、場面や状況を踏まえながらペアで発表したりすることも取り入れている。

加えて、帯活動以外にも生徒が英語の授業に取り組めるような雰囲気作りも大切にされており、３つの積み重ねをしてきている。１つ目は、休み時間中の準備などの授業規律である。授業での道具を決められた順番に並べるなどの工夫をしている。忘れ物などの確認をする際も、生徒と教員のコミュニケーションの時間と捉える。２つ目に、辞書指導である。課題解決のためのツールとして、読んだり書いたりする際には、困ったときにはいつでも使えるようにと全学年通して持参させている。３つ目は、学習ノートである。やる内容にとらわれず、ノートをどれくらい使ったかを意識させるとともに実感させている。

２　協議内容

本提案についての協議の柱は「パターンプラクティスから自由な表現活動への工夫について」である。「Conversation Frame」は型が決まっており、パターンプラクティスの１つとも言える。継続することによって、自信をもって行うことのできるコミュニケーション活動であるが、型があることによって機械的になるため、即興でのやり取りにつながるのかどうかが課題である。パターンプラクティスから即興への転換時期や方法を協議した。

（１）　フレームの良さと自然なチャット

会話の型を作ることによって、話しやすくなる良さはあるが、自由な場面を作ったほうが話しやすい状況や場面も出てくる。今回の「Conversation Frame」は、挨拶から結びまでの流れが決まっているが、状況によってはその流れでは上手くいかないことも出てくる。その際に、どう会話を作っていけばよいのかを指導する場面も今後必要となる。

ひとつの実践例として、One minute chatという１分間の自由会話の時間を作って、「テーマに沿っていればどのような会話の流れになってもよい」と言う時間を作る学校も多数あった。

（２）　１年次からの取り組み設定

始めから自由な会話をさせることは実際厳しい部分がある。そのため、型を作ることがとても大切であることを共有した。六会中学校でも行っているが、１年次から３年間続けることが１つの力を身に付けるための手立てとなる。３年間同じ型を使っていくことと同時並行で、同じように１年次からその型を除いた自由会話の時間を少しずつ作ることで、生徒は今まで学んで来た型を使いながらも、自分の考えた方法で取り組む瞬間が生まれるのではないか。また、３年次では自由会話の時間を多く確保することで、より自然で自由な表現を学んでいくのではないだろうか。

３　まとめ

（１）　新学習指導要領を踏まえた表現力の育成

今回の提案で取り上げられた「Conversation Frame」などの反復練習は、地道な活動ではあるが、新学習指導要領の中では大切な要素となる。新学習指導要領では、主体的・対話的で深い学びの学習活動によって、思考を深めていく必要がある。外国語においては、思考を深めるとするならば、自分のことについて伝える表現力が重要となる。しかし、それを達成させる以前として、土台として必要な基礎的な語彙・文法・パターンを身に付けることは、優先順位として先となる。この基礎的な部分と、型としてある反復練習のバランスによって、生徒の自信のつながり方にも差が出る。

加えて、自由な会話をさせたいが、それ以上に定着させることにも時間はかかる。私たちが忘れてはいけないことは、「定着させなければ、言語習得にはつながらない」ということだ。

提案資料の成果にも書かれているように、Conversation Frameを行うことによって、生徒も自信をつけ始めており、少しずつ自由な会話にはつながっていることが分かる。この地道な積み重ねを無駄にせず、決まった型から外れた自由な会話へと発展させるには、上記でも挙げたように１年次からの活動において自由度のある会話練習も積み重ねていくことは重要である。

提案２　　提案者　橋本　慎一（川崎地区）

＜研究主題＞
表現力を高める指導の工夫
―　第二言語習得理論と CLIL で育てる　―

１　提案内容

川崎市では全市をあげて、自分のアイデンティティをしっかりと持ち、他者や異文化を認め、英語を通して友好的な人間関係を構築するコミュニケーション能力の育成をめざしている。そこで研究を支える共通認識としての理論的背景として、第二言語習得理論と CLIL を二つの柱として設定した。第二言語習得理論に則り、教科書指導を PCPP（Presentation, Comprehension, Practice, Production）、文法指導を ESA（Engage, Study, Activate）の手順で行い、豊かな表現力をはぐくむため CLIL 的な活動に統合することを目指している。

（１）　実践の概要

①　帯活動（第２言語習得理論と CLIL をつなぐものとして）

帯活動を通し、１年生から３年生へと段階を追い、継続的に表現力を育てる活動を行っている。１年生の初めは、小学校で取り組まれているチャンツ活動を元に語彙の習得から始まりＱ＆Ａへと活動を発展させていく。１年生の段階では定型表現に習熟させることを目指す。２年生から自然な発話を促す活動へと徐々に導き、３年生では相手の意見を尊重し、自分の考えを発信することを目標とする。具体的には 1minute chat 等を取り入れながら、段階的に生徒の発話を支えていく。

②　第二言語習得理論（SLA）を取り入れた教科書・文法指導

教科書・文法指導については最後に本文の内容を再生したり、オリジナルのスキットやスピーチを発表させるなど、産出の活動を目標に設定した。インタラクションによる内容理解や音読の活動、また特にグループによる協同学習を意識しながら協力して課題に取り組むことにより気づきや、理解を促進し、学習内容の内在化につながっている。

③　CLIL 的な活動（教科書の題材などの内容とことばを統合した学習）

授業で取り扱う題材を生徒の身近な話題に置き換え、興味・関心を引き出すように工夫した。特に川崎の行事や文化に関するものを扱い、地域への理解を深めるように心がけ、ことばと内容の統合を目指した。また、教員と生徒、生徒と生徒のインタラクションで考える場面を仕組み、協同的な学びを通して他者理解を深めることも目指した。

（２）　成果と課題

①　成果

「他を認め自己を発信することができる生徒」を目指した研究を通して、発話量の増加、英語の使用に関する意欲の向上などある一定の成果が得られた。特に「将来の英語の活用」に関するアンケート結果に顕著な特徴がみられた。普段英語に触れる機会の少ない地域に住む生徒の現状を考えると、授業での取り組みが大きく影響を与えていると考えられる。また３年間を通して徐々に活動のレベルをあげていくことにより、形式から意味への深まりを目指していくことができた。

② 課題

今後の課題としては、発話の内容にかかわる質的向上の研究が望まれる。教材の開発や発問の工夫など、授業を通して研究を深めていく。

２ 協議内容

『英語を使ってやり取りできる表現力の育成の工夫』を協議の柱とした。

何をもって表現力・コミュニケーション力とするかという話題の中では、質問されたことにただ答える力ではなく、話題をひろげる力・相手の意図を含んで言葉を返す力も必要なのではないか、疑問文ではなくて、肯定文に対してコメントする力も必要だという意見が出た。１minute Chat については、Ｑ＆Ａだけでなく、リアクションとして一言加えられる力をどう育てているかという質問については、とっさの一言表現集を渡し、まずその表現集の練習をする形で行う。質問→リアクション→答え→追加の１文という形にはめ込むと機械的になってしまう恐れがある。評価については、学期の終わりにＡＬＴとのインタビューテストを行い、内容やデリバリーの面で評価をしている。単元ごとの時間の使い方としては、単元の最後の時間枠に場面設定をしたうえで、アウトプットさせる時間を設定し、取り組んでいる。

３ まとめ

（１） 理論を実践に結びつけて取り組んでいる。

（２） コミュニケーション能力の基礎を育てるためには、授業の中でコミュニケーション活動をするしかない。コミュニケーション活動とは、アドリブがある、つまるところがある、相槌がある、今まで習った文法を総動員して話すこと、内容のまとまりと場面があることが大切である。

（３） 指導方法を広めていく必要がある。Oral introduction からの新出言語材料を導入していく流れが必須であり、やりとりや言語活動を重視していかなければならない。聞く・話す・読む・書くという習得順序を意識して授業展開をするべきである。

（４） 教科書の題材にせよ、身近な話題にせよ、内容を深化させていくことが大切である。

◎協議の柱に即した協議

１ 協議の柱と主な内容

『生徒の主体的な表現力を高めるための指導と評価の工夫』をテーマとして、小グループで協議を行った。主体的な表現能力を高めるためには、豊富な活動自体の量、反復練習、場面設定が必要で、読み手や聞き手を意識させて対話させる重要性が挙げられた。また、事前に準備したものから、即興のものへの転換をどう図っていくかという話題や、目の前にいる生徒に沿った実践が大切であることも話し合われた。

２ まとめ（新学習指導要領改訂のポイント）

（１） 対話的な言語活動、習得した言語活動をどう実質化を図っていくかが問われている。

（２） 母語を身につけていくプロセスに基づいた外国語教育が始まる。

（３） 小学校の外国語学習をどう中学校、その先へつなげていくかが求められている。

（４） ４技能が５領域へ。話すことの中には「やりとり」と「発表」が明示化された。

（５） 即興で話す力についてはまだまだ課題であり、生徒の理解の程度にあわせて、教員が橋渡しをする役割をはたしながら生徒の表現力を高めていくことが大切である。